

## 日本心理学会若手の会

The Early Career Psychologists Committee  
of the Japanese Psychological Association



# NEWS LETTER

Vo.2 No.1 2017



### CONTENTS

- ・異分野間協働懇話会開催報告
- ・日本心理学会第81回大会若手企画のお知らせ
- ・私のキャリアパス（河原純一郎先生・北海道大学・准教授）
- ・活躍する若手（三浦佳代子さん・金沢大学、古見文一さん・神戸大学）
- ・編集後記

### 異分野間協働懇話会開催報告

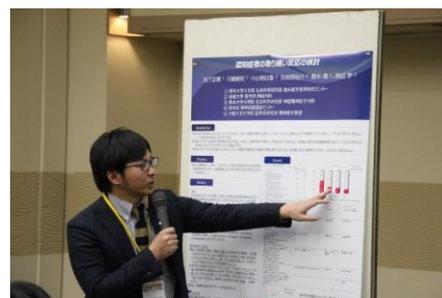
2017年3月6～7日に、第2回目となる日本心理学会若手の会キャンプセミナーを開催しました。第1日目には協働懇話会、2日目にはワークショップを企画しました。

初日の協働懇話会は昨年と変わらない数の方の参加を頂きました。昨年と同じくポスター発表を開催しましたが、1名ずつ前で発表していただくという口頭発表のようなスタイルを採用しました。多種多様な心理学へのアプローチに耳を傾ける時間が持て、発表者だけでなく聴衆として参加した方も有意義な時間となったのではないのでしょうか。

2日目のワークショップには立命館大のサトウタツヤ先生、追手門学院大の長岡千賀先生に「若手心理学者が考える新たな心理学研究法～質的/量的アプローチの垣根を越えるチャレンジ」というテーマに沿ってご講演をいただきました。質的・量的な研究法についてはもちろん、具体的な研究内容やこれまでのご経験など、大変興味深いお話を聞くことができました。ふだん接する機会のない研究法について理解を深めたところで、ワークシートを使いながら相対する研究法を自分

の研究にとりいれることができないか、あるいはそれぞれの問題点などについてグループワークを行いました。通常はなかなか考える時間を割かない内容について複数人で議論することができ、盛況のうちに終了しました。

キャンプセミナーの開催はまだ2回目ですが、前回から引き続き来ていただいた方も複数いらっしゃいました。今後、若手の会の定常的な企画として根付いていくことを期待しております。



初日のポスター発表は口頭発表形式で行われました。



2日目のワークショップでは、活発に議論が展開されました。

（佐藤 哲康・久永 聡子・黒田 剛士・川越 敏和）

## 日本心理学会第81回大会若手企画のお知らせ

今回の第81回大会では学部生の大会参加費が無料になったことを受け、若手の会では、特に学部生や院生に役立つような企画を考えました。ぜひ奮ってご参加ください。

### 【学部生の大会参加費が無料になります】

今大会からは若手の会の大きな役割として、心理学専攻、あるいは心理学に興味を持っている学部生に積極的に学会に参加してもらい、次世代の心理学を担ってもらおうというミッションがあります。ただ多くの学部生にとって、年次大会は未知の場所ではないでしょうか？そんな大会参加へのハードルを下げるために、今年度大会からは学部生の参加費が無料になります。学部生の皆さんには是非、大会の雰囲気や楽しさを味わってもらえればと思いますし、若手の会もそのお手伝いをします。学生証を忘れずにお持ち下さい。

### 【若手のワンショット発表会と親睦会（9/20）】

発表を控えた若手に、1~2分程度で自身のポスターやセッションの宣伝する機会を提供します。大会初日に開催するので、お客さんにアピールするチャンスです。また学部生にもプレゼンの機会を設ける予定です。親睦会も予定していますので、初日のアイスブレイキングを兼ねてお気軽に参加下さい。

### 【若手の会企画シンポジウム（9/21）】

例年通り若手の会主催の企画シンポジウムを開催します。今回のテーマは、若手のキャリアパス構築、特に大学院選択に関するものです。学部生にとって大学院進学はひとつの大きな選択かもしれませんが、どのように自分にあった研究室を選べば良いかを先輩方にお話してもらいます。その

後、若手の会メンバーによる個別相談会も予定しています。

時間や場所については、今後ホームページや若手の会メーリングリストで案内する予定です。ぜひ身近にいる学部生もお誘い合わせの上、ご参加ください。久留米で皆様にお会いできるのを楽しみにしています！

(小川 健二・鈴木 華子)

## 「私のキャリアパス」

### 第2回 河原 純一郎先生



河原 純一郎先生  
(北海道大学・准教授)

### 【ご略歴】

- 1997 / 3 広島大学大学院教育学研究科実験心理学専攻 博士課程後期修了 博士(心理学)
- 1997 / 4 日本学術振興会特別研究員 東京大学大学院人文社会系研究科
- 1998 / 8 ブリティッシュコロンビア大学心理学科 視覚研究室 博士研究員
- 1999 / 9 広島大学教育学部 講師
- 2003 / 4 広島大学大学院教育学研究科 助教授
- 2006 / 4 産業技術総合研究所 人間福祉医工学研究部門 主任研究員
- 2012 / 4 中京大学大学院心理学研究科 教授
- 2015 / 4 北海道大学 大学院文学研究科 特任准教授
- 2017 / 4 北海道大学 大学院文学研究科 准教授 (現職)

**【私のキャリアパス】**

ついにこういう記事を書くお年頃になってしまいました。しかも佐藤隆夫先生の次でプレッシャーを感じます。私の専門は認知心理学で、注意、顔、魅力をキーワードとしています。自分はまだ職歴の終端に達した気はしていないのですが、転職気質だと見なされているようです。若者は先々を不安に思うかもしれませんので、ひとつの目安として、転職の節目で当時の自分が何を考えていたかを思い出してみます。

**とても若い頃（大学院生～博士取得）** 院生の頃は“そのうちなんとかなる、か？”くらいの軽い気持ちでした。悲観的になってもしんどいだけです。可能性の道信じて前向きにならざるを得ませんでした。研究室の先輩からは、どこに行っても一人でやれるような準備は必要だと言われ、当たり前ですが自力で（自前の装置で）プログラミングして実験ができるように心がけました。PCはいまの3倍の価格、インターネットが未発達で無料の心理実験ができるパッケージ等もなかった頃に比べれば、いまは色々選択肢がありますから楽にできますね。ただ、脳計測で自前の装置を持つのは（若い頃は特に）難しいと思ひ敬遠していましたが、踏み込んでおいてもよかったかなと思います。

**はじめての職場（博士研究員～初の任期なし・常勤職）** 博士研究員として佐藤隆夫先生に御指導頂いた後、さらにほうぼうに相談して研究内容がちょっとだけ被りつつやや違うところを第2の博士研究員先に選びました。博士研究員生活は毎日アレコレしたい実験ばかりやっていて、非常に楽しく過ごしました。なぜそう書くのかを一文ごとに説明しながら執筆指導をしてもらえてとても幸運でした。いずれは自分もと（勝手に）思って、偉い先生の授業の仕方を観察したり、来客の講演会ではとにかく質問してみる練習をしたり、刺激が多くて新鮮でした。将来を不安に思うことは正常なことです。あまり気にせずに。この頃から

少なくとも約20年間は自分も家族もたいは元気ですので、研究した分向上することを信じて進めばよいと思います。

博士研究員を終えて母校で職を得ることができたのはこの上ない幸運でした。とてもありがたいことです。着任時は期待に応えなければと（勝手に）使命感を持ったことを覚えています。しかし、しばらくして自分は出身者だからたまたまこの職が得られただけかもしれないと考えようになりました。他所では通用しないかもと悶々としていました。当時の自分は若かったのだなと思います（いま振り返ると考えすぎ）。そんな折にちょうどお誘いがあり、転職を決めました。母校で職を頂けたのに出て行くのは失礼かもと悩んでいたら、尊敬する先生から、“恩師には感謝を伝えつつ、新しいところで試してみたいと言えれば許してくれるはず”とご助言頂き、その通りになりました。ご助言下さった先生、お許し下さった先生にはとても感謝しています。

**研究所と大学** 転職先は工学系の旧官立研究所でしたので、前職の教育学系とは発想が違い、異文化適応を迫られました。一方で視点・立場の違う人々と交渉し、一緒に作業するという練習になり、その後の大学での再適応に役立ちました。転職の際、新しい同僚と1つでも多くの研究を一緒にしてみよう（平たく言うと共著論文を書こう）と思うことでやる気が湧き、彼らもいっそう歓迎ムードだったように思います（たぶん）。研究所は研究に専念できるすばらしい環境でした。ただ、ある寒い春の日に帰省して、義父の畑で芋植え作業を手伝ったとき、わずかにしか引用されない論文を書くことは本当に生産的なのか？と思ってしまいました（また考えすぎ）。そのすぐ後にご縁があり大学で勤めることになりました。自分は誘われたらつついっついで済んでしまうようです。大学では研究の他に、学生さんを育てるといった目的もあるところが一瞬ぐらついた私の心の拠り所になったのかもしれません。ただこの目的は大義名分にも

なり得えます。今時は研究所も大学と連携し、学生指導の機会も増えていますから。

**異動したいときは** ある先生の御宅で、奥さんからこっそり言われたことがあります。「大学で職を得るのはね、満員電車に乗るようなものよね。たまたま立っていたら目の前の席が空いて、チャンス到来!でそこに座るだけ。うちの主人がその典型でしょ。」そのときは笑って応えましたが、確かにそうかもしれません。それでは、どうしたら空席のタイミングをつかめるでしょうか。強いて挙げるなら、次の2つですかね。1つは当然で陳腐ですが、準備しておくことです。いつでも提出できるように履歴書に添付する例のリストを長く、多様に、そして最も難しいことですが高品質にしておくことです。授業もある程度うまくできる証拠や、他の対立候補とは違う、キラリと光る星を用意しておくことです。もう1つは、声を上げることです。自分は異動したいと思っていることを、ここにいるぜえ!と潜在的な雇い先に意思表示する必要があります。意思表示をしないと、もう完結した人だと見なされるからです。具体的には、母校を転出したときは「(母校で勤めているので)上がりかと思った」とよく言われました。また、研究所を転出したときは「研究だけ専念できる環境なのになんで大学に」とよく言われました。私大を転出したときは「環境もお給料も十分でしょうに」とよく言われました。異動の意思や理由を(洗いざらい話す必要はありませんが、状況に応じて)知っておいてもらうのはチャンスを増やすかもしれません。採用する側から言えば、任期なしの役職で全く知らない人を100%の公募で初見で判断するのはリスクがありますので、業績が同程度なら知っている人を採りたくなります。そのためには積極的に学会に参加し、他の先生方の講演を聞き、質問をし、懇親会などでお話しをすることは大切な機会だと思います。

**気づいたこと** 唯一理想の職場はないと言うことは2回目の転職でようやくわかりました。大発

見だと思って何人かに得意げに話したら、当たり前だとか、そんなこともわからずにこの業界に居るんかと散々言われました。ヒューマンエラーで第1の問題が解決すると第2の問題がそれに置き換わるのと同じで、不満ゼロはあり得ません(あ、皆さんご存じでした?)。転職は金銭的に不利ですし、家族に負担をかけやすいかもしれません。ポジティブに捉えれば、いろんなところに住めて楽しくもあります。あと、観光地に転職するとお客さんが増える傾向にありますね。そういうわけで皆様、いまの職場は駅からすぐですので、札幌にお越しの際はどうぞお立ち寄り下さい。ここで書き切れなかったことをお話ししながら学内をご案内します。それではごきげんよう。

### 「活躍する若手！」第2回

三浦さん(金沢大学・助教)

古見さん(神戸大学・日本学術振興会特別  
研究員 PD)



三浦 佳代子さん  
(金沢大学・助教)

私は、2016年の8月に金沢大学保健管理センターに助教として着任し、現在、大学生のメンタルヘルスに関する臨床業務や研究、教育に携わっています。

もともと、臨床心理士になりたいと思い、大学に入学しました。大学は、長崎純心大学という小さな地方私立大学です。入学後は、心理学の幅広さと奥深さに触れ、特に神経心理学に興味を持つようになり、職業としての研究者を考えるようになりました。まずは、“臨床心理士になる”という目標を叶えるべく、長崎純心大学大学院博士前期課程に進学し、修了後は、母校で助手として3年

間働きました。助手の任期を終えた後は、学部時代に興味を持った神経心理学に関する知見を深め、「将来は研究職に就きたい、大学の教員になる！」という目標を持って、富山大学大学院生命融合科学教育部（博士課程）へ進み、日本学術振興会の特別研究員として資金面の援助を受けながら、人の神経心理機能に関する研究に打ち込みました。そして学位取得後は、約1年半の間、富山大学で環境省主導の出生コホート研究に研究員として関わり、現在に至っています。

こうしてみると、院生時代から研究員時代、そして現在と研究テーマが変わっています（積極的に変えているわけではありません…）。アカデミックポストに就くことが簡単ではない中、私は、“一つのことだけに固執しない柔軟性”、すなわち自分が身を置く場所でのニーズに合わせ、柔軟にテーマを変えることが出来る力も大切だと思っています。現在も、今いるフィールドで新たに自分が興味を持てるテーマを見つけ、充実した生活を送っています！



古見 文一さん  
（神戸大学・日本学術振興会特別研究員 PD）

私は、日本学術振興会特別研究員対象の海外渡航支援を利用して英国の University College London でヴァーチャルリアリティ（VR）を用いて他者の心の理解の研究をしています。

こちらでの研究は豊富な人的リソースによるスピードが特徴的なように思います。最初 VR は計画がなく、一から研究計画を練り直してスタートしました。本格的なプログラミングも初めてでしたが、多くの人の強力なサポートのおかげで、渡英後1ヶ月で実験は完成しました。膨大な被験者プールのおかげで教示の確立と実際のデータ収集も10日ほどで終わりました。

一方で、環境などは日本の方が整っているように思いました。コンピュータや実験室がこちらでは不足しており、大きな実験道具を実験の度に移動したり、廊下で実験をしていたりという場面にも遭遇しました。

私は、今回の滞在を通して、論文を読んだり、短期で滞在したりするだけではわからなかった英国の研究事情がよくわかりました。一流誌に掲載されている研究の様子を肌で感じられる在外研究の機会を若手のうちに経験できているのは、非常に幸運なことだと思っています。もちろん英語や生活の面でも苦労はありますが、そんな中でも研究のヒントが多くありました。是非多くの若手研究者に在外研究の楽しさを味わっていただきたいと思います。

## 編集後記

今号では、みなさんと共に過ごした異分野間協働懇話会活動報告をお知らせしました。また、今年度の久留米大会の若手企画も、内容が盛りだくさんであることがわかりました。久留米大会の参加費学部生無料は、若手の会からの提案で実現しました。学部生に積極的に学会に参加してもらい、次世代の心理学を担ってもらうことが目的です。興味のある学部生には、皆さん、ぜひお声がけください！

若い力が世界を変える！今後も若手の会は、未来の心理学にとって良いと思うことをどんどん行っていきます！

（高瀬 堅吉）

発行：若手の会幹事会

〒113-0033 東京都文京区本郷

5-23-13 田村ビル内

公益社団法人日本心理学会事務局

[ips-ecp@psych.or.jp](mailto:ips-ecp@psych.or.jp)

2017年4月10日発行

編集：若手の会幹事会

